



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN mm cm

へ13
3044
2

あせ仕大件利身二卷

人化人



人のくせにておよまりゆのときも猪^{いの}とぬうての二年
の處^いくつてゐたる人を五^ごきう^きあせともかくと^き續^{つづ}るの
ち^一ふよひりふとのよきう^き鑑^{かん}のこ^のけも一のえぬいと大^{だい}物^{もの}
の鼻^{はな}うりをくね^ねしてかくすれかいこうつま細^{ほそ}やくをも
やうにやうとくをむかへん人よまけぬ心^{こころ}うきいもとむし^しくを
ぬきへ生^うするたまもとよふ心^{こころ}うきいもとむし^しくを
死^めすうよ思^{おも}ひむとつや^れえよと^と猪^{いの}よまけぬゑ
こうまけよいとする人考^{かう}そ^うあせ猪^{いの}まで^{まへ}よ



まけぬ者ハ多様く、官風は済者よ眼根、二箇所をやむ節へ
移す事無く、其を重ねて、總て之等で、何んか是が爲せ
の事あそが、そは七事うちとつふるよりて、前へ續
りく、或は出家ゆ門、と、或は帝の行は、墓前と曰うる
やうる。かよ今、老若男女の、ヨウモトナモハの事も
ちまたの、ひび語りく、りも、六字斗れば、ちや、クモモモモモモ、眞
風の、経も附よみて、、筆のぬきよも、あしも、おきて、が、そ
墨をへうそとひの、放りあよふやく、係るには、かぶひくに、口
をのやすらせば、ほんじ、全紙を五鉢、き、内代こまえ、
とつゞけのあと、ふくよく、大伝、ゑうりて、ほむは

あんじよひなまく内マサニも運トシてマツシがおこちの駕カ
移シふうの音ヨミすとまんく、ちりりんリトドケタやうで、ちくすさん
のきぬくゆキのいわんよよじくシテみづよいつさんや
まきのまきかさんあく、うきのアんたニラン運トシて、運トシて
うきの祝文マツフをうくとふアヤマツシ会マツシと、祝文マツフをうきこシる
まよびひふやうとひ川カワの辻ヤハラのちびやどあしはすふて別セ
クをねくわうすめーくはなこうを華カサれの辻ヤハラを
ぬれて、雪田カスヒタのア念マナと、雪カスを老カシ女の袖アシと、雪カス
き宵ヤクニよもづくと、風呂マツコを包マツコみ、行カムりとたのあくとま
よイかといひくと、風呂マツコを包マツコむて、アヒとまよ

かくと今來カミカミハ山マツコの秋アキからうひいたうマツコとてハせセ
にこまきんカマキニがちがよガマヨおよやくとよお義マツコ一ヒコそまマツコき
とふらがぞくカマツクふくマツクよまマツコまく風カマツクのゆマツコどや矢マツコあマツコて
大きマツコいをあマツコいしものねマツコみマツコ、やまマツコあマツコさマツコもマツコりマツコ、
玉マツコあマツコどうゆそのねマツコみマツコあマツコ入マツコるあマツコうとマツコひマツコでもマツコれマツコ、
の駕カりマツコを旅マツコかマツコちマツコおマツコてマツコ、あマツコの村マツコいせ
めマツコるくさんカミカミのあマツコきマツコ年マツコあマツコ是マツコハマツコキマツコ、あマツコはマツコもマツコぬマツコさマツコ
とけマツコえマツコうらマツコよマツコいマツコかマツコうんマツコ今マツコくマツコとマツコ馬マツコう
ちマツコえマツコれマツコうらマツコふマツコそくマツコハマツコ集マツコ結マツコ、所マツコのうマツコあマツコうマツコ
経マツコよマツコよマツコうマツコたよマツコかマツコうマツコんマツコあマツコせマツコうマツコかマツコけマツコえマツコいマツコまマツコ



而の時よりも少とぬすへ今まで空よやう
りどくもあらんねせんをぐれぬれまへと
ろ念をよきせりうるげきをざくあひゆとやいな
エ、もも用うよつてユリもかみのうけ便利フクセトモ
きすぐイヤさすでもゆでてもういうの耳ゆでモヤーラルエ而
ユリ、重くま
一もまた海月アケたよ連念仏あるを切彦アホアホ
言ふらううらあまの放りハ西流よ出程とつひ落磯で
二三もひ立きとくが常とたるよ又一もとほ利よつめこむ
所の多處に生トの砂地と擇切よチ案の大壁うちきて

ちりくま^ミ孤^セ水^ミ寒^ムへ^シゆ^リこ^リや^ホグ^ミ初^モ
月^ミ秋^モと^シ極^ムあ^リう^シま^スす^ルぬ^クり^ヒと^ヒ
車^ミの^シ行^ハも^シり^ト耳^ミつ^ムぬ^クは^シの^シ
大^ミき^ミふ^ミえ^グ一^セい^カせ^トも^チよ^ミぬ^シの^シ
月^ミ秋^モか^シく^アの^トも^リ海^ミ多^シい^ハ成^シえ^の遠^シマ^シ
き^の煙^ミも^クも^くく^レい^ト金^ミ波^モう^シ一^シ日^モを^あう
た^行と^あの^火全^ハ入^ハぬ^クり^トい^コひ^それ^こそん
う^うも^うア^シよ^うあ^アう^シお^アき^ア蓮^ミ室^モか^シ
口^ミ呼^ハふ^アで^アま^フか^シら^フも^タう^施ひの^ミ切^シ
ふ^アふ^ア二^年、^ハシ^ミと^アた^シ宿^モた^リま^セや^ア

来る。ごくいとクナイも安ニカリふ。やくがまくアノ火で
ヤクあくめでまとめて引よとさうすりれ。が、一火歌れ
にます。かきはゆももうすり老女おじめのめ酒さけ。よ
りづみつき龜の甲カタのまへ中にすすくとさすをあふ
せうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
せうきひゞくとトモうらうらうらうらうらうらうらうら
にハゲ逃ハシマせハサハサぬもなにぎよま
のあへはりまひりう念メモうとつるうれとやきと行ハシマ
やうれいごうとせまひをはのくらをひのくまひよていのう
きくまくさんあとこらぐニアヒニヒくううく老女おじめが
みゑよ娘むすめの匂におぬけくよヤレナラか助アシテ等ドにけよ

やくいがくを、もうのたこも我つとちんくうりを
くく迎ゆる歎あづれや（羽羽）とか、隣りあ向
多アハチクげトイヤモ有クシテとせらるてひのあ、さいも
想ぐるをぞきみる爲シタ熱ひそやくひたり等
アハセリハヤムウムのひまつアハセリムキ年年計もち
ぞきぬ血のひだを、ひくひめからずさうひきはれ
ことそゆくじやどもかこちのたてねも強風のもゝ
ちうてすれおれ、計えてじやス全傷ハシメ、よもぎ
をぬけのうけ、トモ家事あざんさくニシテ、多く
出入家のうちあたはせ生糞金仙よと云れて被遠

乞ひうらぎと承のゆききいのゆゑひに往來の毛も
よぢちうりき入くにゆるたことのゆきりよんがく
むじとおじとす一筆す一掬せよやうきどとよねがふ
いわじよとじ年とおはくつてうきみまはかいていろか
きぬくじらゆの承ヨリらうけのとせんせそきまじ
てまくまくいなはいアリヤあめのあで迎而てひふとす
る財産の甲子サ火をとむくとやうるやうき
年ハキナオとつて一厄^{あま}殃^{あや}とアモ助けてくわよと
う一厄^{あま}二厄^{あま}の吉^{よし}あくセウ永^{えい}もくゆふうと行^ゆ
ひ方^かのこりまへこめくの無^むれん第^{だい}四

小^こきの遍^{まん}思^しと經^きうちあは廻向^{まわむけ}の聲^{こゑ}スマラありざの
心^{こころ}を治^なや弘^{こう}果^ごゆんすううしげの聲^{こゑ}とがふ諸^まをた
が^わの佛^{ぶつ}ハセコト^トあきひ^ハむ^ハぬま^ハ速^は不^ハを助^け
てや^ハと^ハ仰^あう切^{せき}法^ぼと志^しゆんや^ハ義^よと^ハよ^ハん^ハ乃
七^{しち}事^{こと}を^ハ度^たよ^ハ素^すと^ハ紀^きく^ハ切^きれ^こが^ハいの聲^{こゑ}^を
であろ^ハまく一^い呼^あの聲^{こゑ}と^ハ紀^きく^ハ切^きれ^こが^ハいの聲^{こゑ}^を
り^ハまくと^ハあいと^ハ家^いと^ハ入^い、竹杖^{たけざ}て^ハうぐて^ハふ
ご^ハさ^ハと^ハあいと^ハ家^いと^ハ入^いと^ハえ^ハせ^ハゆ^ハれ^ハい^ハと^ハ迎^{むか}
し^ハか^ハと^ハ出^でま^ハと^ハき^ハと^ハお^ハま^ハの^ハぞ^ハと^ハく^ハく
往^{むか}う^ハと^ハ出^でま^ハと^ハお^ハま^ハの^ハぞ^ハと^ハく^ハく

あらう日あくまであくまでとおこなひよどりて仰あつて
がく病う人ともとよれておはまねておもへどこはせう
ふきまゆるをどうぞうそんあ、おとづらうふくあうとつば
口びんお車たたでゆくそちやんわうねのやうきひ
もう一車にアタリとむけおはういよ極めて
車そか

書體の壇

あせんかくよひのれの新せあこナニ西よ海くまほす 四
王の勅書と書寫は性室と人長をの法とよく正室とて
え難さのあまり附のと星花山の院と奏ゆゑてウハ難

因ふ法門は深くゆ休すキテこれかうりもかう三セ
ゆひ山よりお傍と連立寺一處お延命寺と名す
娘濃列谷汲それと納めゆてより代順れよき殿老
善くまうくあるととてこそ有難き行き佛事と善の
良候重もおき門紀もお御法初に法言菩薩と拂
大意大些のりあとお詫めおき、ゆきの佛事とゆ
かとりはなづれただよけてもお二月堂のをもれれて
度々おさすおもむかうじのれはあはあ全乃
すり猪と瓶付みとにひく、かせて 鳴鑼あくと物
さう今のあれ所色アヨ一生ふたの尼五経を聞國の

大行者くぢと御ウラスと信仰シヤウヨウ一まづふと漏トトロ一浪陽
三辛ニ不ハシナルニ一月二月三月もわくの系傳祖西一世の
御ウラスあくは一も五月の經リョウ御リョウ日ヒもあらそひの前よりよて
常高マサタケより今前コトムカハ翠アツもよ通ツバ也ハシナんあと社奥
五度ゴトて御取モダク御モダクもりモダクよ御モダク也ハシナに
ねむあくまくろもとうくておうウラスわきをもよ御モダクを云
らと御ウラスをかひ神ミツを夢ウラスやふいふをす年ウラス我
御ウラス信ウラスもゆ化ハシナすハシナ神ミツ猪シロく異ウラスがをよウウラス
猪シロくあくは是シテ器カタが中ウチよゆくみは邪ウラスま流リひて
病ウラスよウウラスし老ウラスまウラス一ウラスは水ミツは漏トトロとく義教ウラス

井の清潔ウラスふこ毛ウラスとあよウウラス一ウラスじ老ウラスまウラス一ウラスの
大病ウラスも平ウラス全ウラスせんウラスもううひやウラスも水ミツは義教ウラス
とウラス下ウラス漏トトロの大海ウラスのウラスもウラスれわよ公ウラスと
みはそはうさウラス一ウラス剪カミく無慾ウラスのウラスがウラスれを築ウラスのウラス
もウラスくさウラスくウラスとこの年ウラスの公ウラス勸ウラス立ウラス一ウラスと行ウラスめい
すウラスわナセ秋ウラスの月ウラスけをまウラスうりりれ歩ウラスきよ目ウラスも着ウラスを
さウラスかウラスあウラスのひ着ウラスうれウラス儀ウラスありとウラスうふ差ウラスお
きウラスとウラスとウラスへやんさんウラスのウラスれはれあウラス内ウラスよ水ミツ
うウラスくとウラスうり眼ウラスの足ウラス駆ウラスうとウラスも直ウラス義教ウラス
ありとウラスとウラス大慈大悲ウラスの苦ウラス松切ウラス法ウラス一刻ウラスすく病ウラス人に

あさんとすこねぬもるむとすこねとゑんすか
ほやましげほよ本陣の里物の村馬ハあれとがつて
まであせ玉水すゆすゆ 徒歩に來たせばよとや宿の
て朝田の村をかでよ小金の邊おぬりとすこねの旅人
を多かずすけのくそれ候、ゆうはばしに足利
山能とかけづづくわらはるは場よ波とよあふ便
金日くにかづく波しりまつて伊勢のとく夏よす
にそりあわせみ病若多くつゝよ、ちよきうけりふ
き人よや候で下らひゆ一水切ハあ接くとはへ思
はるまんくちりふ思えとつむぢうくを清清こく安

はくく和室の病く、宿室すゑとねに日くに行ふ仰
といふてかりみせれ玉水のくまきくせりやうあるゆとふ
不老不死の玉水大慈大悲の山東玉瓶をあがく
もよびしのうじか

法火禁體

知りぬひの禁体のゆべいと白濱のことを近の湖水と
大津うちをあ津までは、あとすててあらすけ食せ計
せし人よやうれいとやねとせんと友縁といて清じく
度清とすうはぬあやぐとゆか一丈五尺つづく
うそは行生鷹の急よいうちか一雨宿とねまよ早日も



萬々と金毛の邊のものもわざうへ、さうり火の前で
かまきまきをねのうをとく。あやえのせうとうに弓山
のせう脚もきの日と夜ふ。軍事いがやをもくもくもくまく
まよおやおやまとく。妙人のぬの草トボリともく。
旅心のひきすううば麻もやうじて官のるゝあの壁る
とゆしうねうかむる一つの後穴りくまうり波のうよ
だよよふよ又門とくは史もの方よ蟲あうあ歴
とくううトううりて入れて、強ひ合或ひ別しうきて警
くする門行やううとくけぶむとくよあ歴ハ酒やうに
あつまね想うへきよ身うり是ハ仰みけ迎みて破れ

一て死マテ老の魂もくほむせうくて、かく迷ふりの
あくわといふおとこく、称あうとやて夜のゆうと待
おうりは是する。因夜もゆうの馬せ御、雨もむも
てあも出しきふわうく順れそもよくひわはは
人形れよ歴のきのひとゆるりふねハ例のたうひり
あひよく歴ぐくね只ひ而く、やかずれまわゆ
はがつねりあきハ足すういのす小谷のひよかく
木と済経うと御く海セテ被まを平とヤ老の娘よ
か布とをまお界、年八十キ男も口村を信筋
うひこ經寶よ下るやせあひとて年には信筋とてサ

子もゑをうへしちあとふとソクテー、ちやん、子供へアロフ
ま、生誕はめめりとおひつあゑ、おめめ、おきせ乃
たのとくすま月のいきき、ちげゆとおよゆと
あく、あひまちもやうると、ゆきほれのむかに
月えとあらんくやくを、おちゅう、おもとまに村庄
持門が十兵と、りふへ嫁入まくととのひす、お結物もやうる
とおひよ、お布もぼを、信州、ゆうと結婚する年は
七月十五夜本のやね地蔵の法會、さうつけやまくと
思ひ出をましめ、はじそ殿して下さらせはね
事、おとせくへと、ほきのうりをよまちもかくよ

さよあはれのむすめよおひつこに却て後あや
のゆうすよせとあきておまぬをほんぐみ取る
わくせんと傳ゆきまなみ一にはゆねねの御諸事ら聖
の私場あはれのゆゑよふれへ別れくよあてどう
急半引文やあき事やうんのう則りといふと
やくねはるのかまくまばのゑねつてむとさ
色の身

書寫化物大譜列二三卷

